国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4

ガラス使用

洛陽名所集巻之五目録

龍渕寺　新熊野　東福寺
萬寿寺　稲荷　深草
雲深寺　宝塔寺　藤杜
岩倉　安祥寺　醒ヶ井
栗田山　青蓮院　花山
木幡　小栗栖　伏見
　　　　　　　橋ゝの橋

大正 7. 11. 21 購求

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4

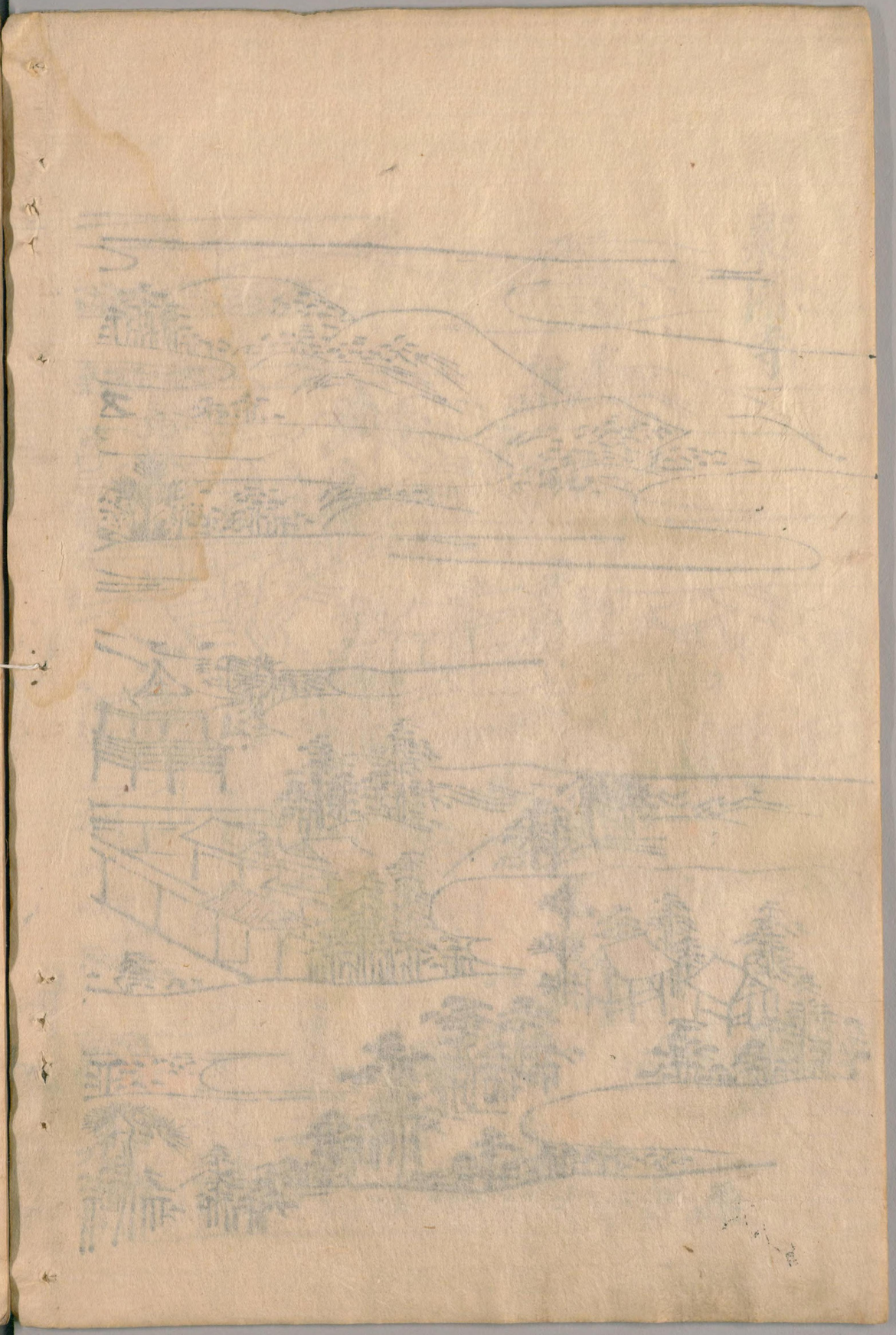
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4

ガラス使用

泉涌寺

○此寺ハ東福寺乃末寺にて。左大臣道家公御建立。開山ハ俊芿律師。本尊ハ三世佛。脇士ハ文殊普賢。此寺ハ。もと泉涌寺と書けるを。後ニ仁下信房後鳥羽帝に奏し。再造ありて。泉涌寺と書なせるとぞ。寺の傳ハ不詳。



国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4
ガラス使用

後苑。字ハ矛可桑肥後乃飽田郡の人也七歳より
て僕と伏よ〳〵そ〳〵じ九歳の〳〵て列の味
木郡の吏酒憑美呂よし〳〵なづまく自然と
りて十歳のく妙法華経を六日にしてとげ。
五の時飯田乃真後ゆきうこひ顕密の教を
まなぶ。十八のく落髪〳〵大宰府
乃観世音寺よりて奥州飛驒守に建久九年
に没家をんとゝもとゝもおもむき百日乃ち眠とち
精進〳〵ぬのち三月乃ちゞめ江陰軍よりう。徑山よの
がつと蒙菴聡禅師よまもろこんぴ多し暑熱る

如菴隆宏律師より。律部伝なろひ持犯
開遮ともにとげわ。建暦辛未のとし帰朝
をう。宋地よおれつゞおもひ〳〵ことゝもそ
ひろこゝろざしある。もれつゞおもひ〳〵儒僧の
ゆくえ。九二年百ゝ也。学問や。りうとせ。
真應ゝ年十月よ。肥列の朝史平泰時乃招
ゆり〳〵時。元列の朝史平宗連乃ゆきて
乃ちく菩薩戒を受め嘉禄元年十月泉涌
にものく。寛喜ゝ年二京にてりう。詔澤二京
ともに泉涌ゆき〳〵。中興よ也。後鳥羽帝
嵯陽宮のく菩薩戒をうけ乃ひてのち。隠

帝まさに菩薩戒を受けんとしたまふに
の官吏秦氏もとめたてまつりぬ。九のそう。病重くなりぬ。
ぐし。醫亟にかかるものなくてもはや危死よみがえりぬ。父母なきことを悲しび紀、はなはだしのなげくみひとうなかりぬ。盛法を講じ。信心いのちなきバ。
蘇息しけり。衆比丘くもの。
妙行ありき。初勢ひ邦畿より使遣し。一仏宣
はたらく。正法寺ひとつめの那波の内。
木像金銅ひとつ。夜やをりふしてくはまつりぬ。
まつりし。安貞元年三月八日に寂せぬ。

寺の六十二ところ

新熊野

○此寺ハ泉涌寺の小也。紀州の
ものゝ二ハ権現とうそう
ざうなり。此地十一面観音。
十二ハ乃観音のそのひとり
清閑寺

○此寺ハ新らしきの辺に伯父行
さでさそふ小菊屋よりおくる
おつるなり。也にて清閑寺ハ
一りうハぴらうこのふるさと
ぞかし

東福寺

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4

ガラス使用

東福寺　恵日山

○此寺八大佛ありて八町南也。開山國師十境と
て　砂雲岡　選佛場　潮音堂　楠檀林
　思遠池　成就宮　通天橋
　耳露井　洗玉硎　只なし
釈迦圓字ハ圓ホ姓ハ字氏駿
毋ありて駿乃ち生ず。故四諦外別立法性と名ク
禅席すまでなり。
て禅師滞留ありしと。ホ解釈をなせり。十六ノ
三大部ありしと。十八の字。圓屋
野列の長楽寺にも。栄朝よりひろめ

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4
ガラス使用

寺通ひとひらもわ。
うけ。相列寺寿福寺よりう行勇よ礼し
んとの。院住持首楞厳乃雅問を加へ。その後
易経をひ。宋地より入らんとくて。喜
禎元年に。明列の器よりまり高僧隆
よ寓し。天童之癡絶冲より礼し。天竜寺の月
栖庭台宗相承乃晶公。閻浮乃楞厳。
楞伽。円覚。金剛四経をうけ。ぱる
浄慈の笑翁堪。霊隠乃石田薫よ法をし寧
退耕より受。無準範の明宗なる公さ。住心よ
のごとまもえし。仏鑑そのまゝ。嗣許

し。前よりうけて。舎中乃大象龍翔て
なるつ。淳祐元年四月よ。道。密庵師祖の法
衣よ自賛の頂相いてしめ。同之月
四日之寂し。享秋よ。
乃西寺にあまうけ。正嘉元
国藤原道家よかう。相国僧とうく。
文後嵯峨帝。勝門の菩薩戒をうけ弘。
黄金翁と。ありよあ賜ふくる。建治
元年。亀山帝。命を宮中にあし。教の敞前

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4
ガラス使用

祇こと作ひぬ乃ち。深草帝。菩薩戒授うけ
たまもめ。又堀河漁太師と教乃大吉を同輿
け里ばこ教要署ここと迷呈ーけつぺ
じめ。さ毎ぐくの三の悸ぐ
もぞそもしいおそうぐ。
を城東よたらく。浩基とおぐ
祇。響福よなしく。東
俗よ。新大作ここくるぞ
そもと。冥の伯おそ
浩営ひへ。なおよおて
門寺祇たくとおそ

東福開堂ーけるもめ。正嘉元乏に平副師去
と招刃よもあるよ。望る征夷大将軍にめして。
治の遽仁を領じ。その。徳化のち也る事
じくれてあるる。弘安三乏の春。徴疾にかう。
常楽庵にうつる。十月朔日。法鼓を鳴し
衆と為よ集めいも作る。御後ての日を
まな寺。法堂。寶業。主産のよりめうもう。四の
句を祝涅槃よ入むもくかけまじ。後顕まるおく人
晩な寺にのそんおもけまじ。
君ぐぐ。十六日よりてうり。示ぜ。侍僧よ教じ。御学
瀬掃せよ。晩るまおそもやもそ

して。越後乃多傳まつ。尓。相乃とりつゝ
むもそでに指しめ。遺偈曰。利生方便七十九年
設知端的仏祖不傳正和の末つゝめ徑を國師
かたまつ。元亨釈書にも要書せり
世にそくそやと。元享秋書に三十巻漸其集た
寒三郎韻なとい。ひ寺乃うつ。
宏濟の慧光乃ふまつ。ふ。
多中に大蔵経の号板とそ
世に行なつ。支也。法堂仏殿なつ。虎関真

稲荷

○此社ハ東福寺より八町南や
和銅年中にこの外もぐいちうと
ほうりも社ありしを空海東も
或説にて。空海東も門外
菊ぢりもの遠ぞのまゝ東
なるべきぞ。いかゞなへ
やそとこさまよりて。稲荷。
李部王記よ。延長年中に狐
法師よ告かうりて大般若を讀誦せむ。
狐ら。濱をんとなるも

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4
ガラス使用

上中下の之社　上社　客人十禅師　中社　大宮四神
下社　大宮女神　延喜八年にもうけ
田中

もうでや

稲荷の社乃れいのに。我たのむ人の移ひを
てもてうくう事世におるもうの灯
親のもろ〳〵なる祈ゆへなるべいなるまも
るをもの事ととりいも
て多ゝまる。法師乃そ　永な世まもる
いづれ〳〵も之のにて
なるをもへうなるげくもれ
やどうもへ

藤杜

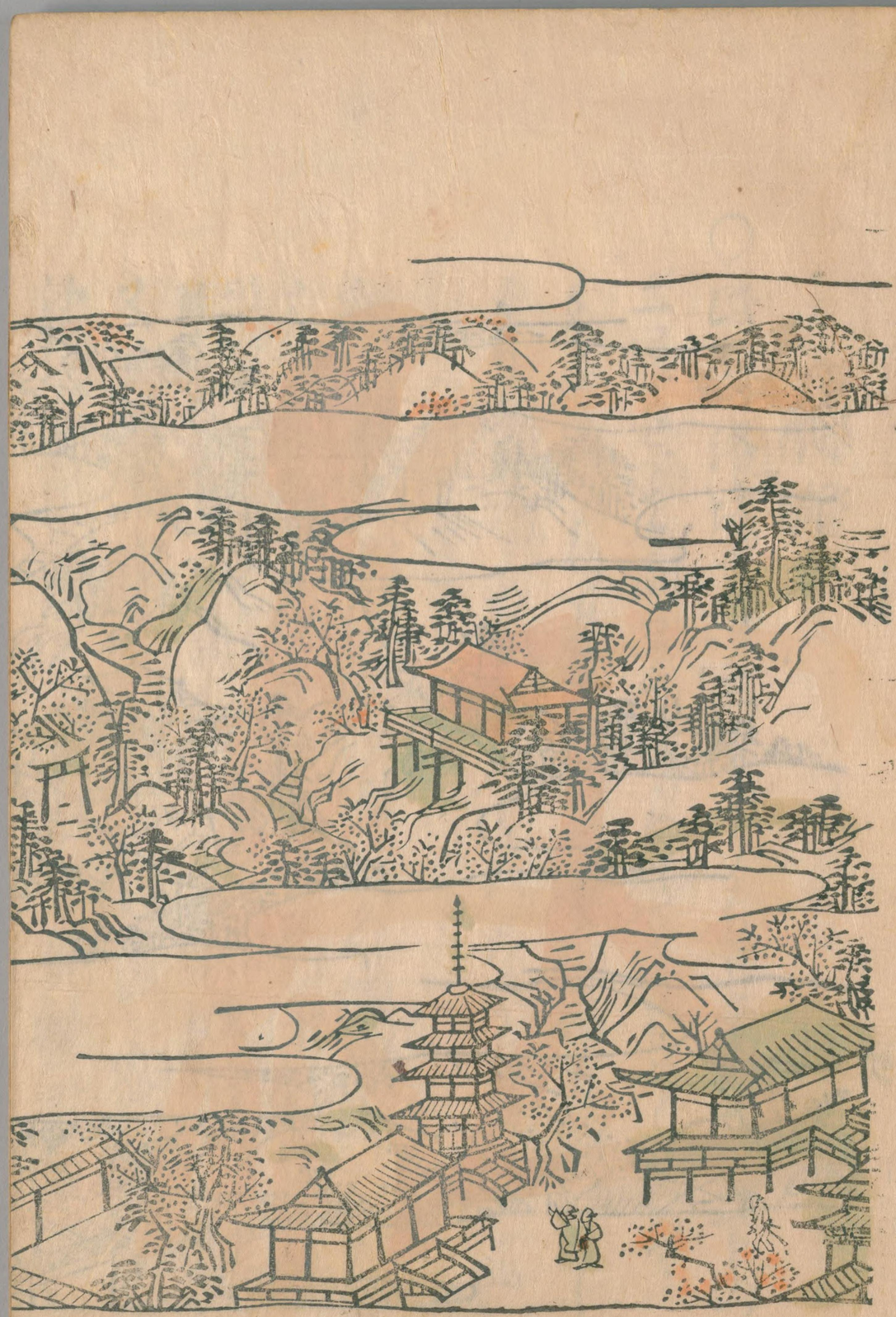
○此社ハ。深草乃里陽成院の崇道
盡敬天皇の廟とて
元正天皇養老四年四月一日舎人親王勅
して。日本紀三十巻系圖一巻をたてく
まつらるゝ。○天平宝字二年七月舎人
親王を追尊して崇道盡敬皇帝と称し
當廟史人なれ大まん人と社ハ
親王の御墓の如くなり

○

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4
ガラス使用

○此寺ハ京より二里ばかり
仁明天皇嘉祥三年三月廿一日に崩じ給ひ
給ひよし此おに葬つるをもつて
草天王と号し奉りぬ
さて寺の谷よりけぶりの
あるをみるに古今集に
うつなく夕べをなげく
と詠ぜしの里。宮滝
秋の景なのめならず
ふつくさや雪ぬ色よ
夜もすがらなりぬるみ
らむ。おがくぬの夏の鶯
なるべし。いづれか
くらもほうもあ
○里深寺　日蓮宗
乃梅ちくこと古今集に
への梅しんなもこと
さけりともなく
○宝塔寺　日蓮宗也
ゆかれし本尊
衣
ら
鶯
か
籠中鶯
ん
深
や
ハすゝめて
ことを

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4

ガラス使用

醍醐

○けふハ洛城より三里ばかり南や上下の二ほうさいこう四方千町ばかりもものすごうもおもしろうもなつかしうもひなびぬむかしなどのあはれをとゞめたり。賞翫ふかくして。

釈聖寶ハ光仁帝の後よく讃列乃今より十六世の孫。真雅法師よりそう。得度し三論元杲侍顕暁圓宗唯識陳大寺華嚴東大寺を学び。又金剛峯寺の真然よりして。密教をうけ。奥秘をきわめて。

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4

ガラス使用

玄のう興福寺の維摩講は猶ほそく。
鑑聖武二宝亀墨義をたく伯里ぬぞで
め東大寺の東塔に恰理君のさそうまて衆
うかをそ迄ねくざうに。室うけく。
物に設のうう。てまくなるぬで。
つくなるそしゆ。
志のうのやしたわざなるうな。一
又室そしく大かくばげ。ようこくるに。梁間
う。大地くぐおなる事量う新
物うしく。室あしくいるとけくう
しぬ又色に一の巌石そ。公金堂山

う鬼王くぐなのくに人力のあそ
く及で事にのうもでや。室そうぬ。
御建をそのそ。名ふ実比我めづるしぬ。
金峯山をけうくなそ葛城などには
うるう。ふそそうなくいもおたく
仏くに。鬼魂のうくぬまそ。醍醐寺を開き
顕密乃二教をのべ南亘乃東南院をそ。
と論ぬ室をそ一丈六尺大像二手係
ばく架。悲涙ふくく津ぬめく。韓紋金
峯山うをさ。浪毎ぬ石窟のよ新けく。
ぬのあらぬ。仁和三年勅よ

て。傳法阿闍梨をもあまりて。寛平二年よ。眞
観寺乃座主やうになりぬ。延喜のすゑつかたも存
俸ながらけぶのやうに。備へにくるり。同の年よ。
醍醐をたゆまり。齢老となり。門を閉て
普明寺のうへに。病よりも
幸向しおもむくも。不上皇
て代くるに。仍授しおもむけ
さめぬ。興福寺維摩講師うるべの如き
もにまるべくもあらで
年七十八にぞ。又室。
乞師のおもむきに。西に三鈷杵をなげり。顕密
なげう。濱噂に。遁ぐるなりとぞ。
る乃おもひ。東大もうとうのおそをいぶさ
して。講会をもとどめやそのよ。
朝廷。東大もよ。官じ
もりしに仍つかぬ。滅に
釈延殿姓。橘氏但列の
白髪にのぞむ。慈仁
ちごのよ。山家の法
寮頭ともに入唐し
ばで死ぞの偉業
景雲乃ころのく。皇

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4
ガラス使用

客法師。寛仁乃至多武峯にこもれ。
おとも志ほのうて。こ學よを二さいそ。
居まるみ。明快法師よりめ。
かへまつ。大安山より入。覺尋ゆく房をなり
うし。よりめまつも。中納言顯基。殿のしてまつも。
をもうし。法眼院に芸術
ゆるもの。長暦二年春。慈覺智證のも
座主位をつのりそもし
て。醍醐寺にうまれ
ぬや

笠取山

○ひこいは醍醐のなるひ
毘房主のて。うちのほくに笠取山
い枝でめるくんなるべ
露をりくに笠取山
めりん。又。雨もいぶ
思白雲のまとうもの
ようくになるさ

山科

○けふは。都より東南
後拾遺よ。和泉式部之

みよかくれがのくもこそ心ある。

又藤原隆信朝臣。春の比ある宿のみこれなむ。

きまして。梅花ちりなる宿のみこれなむ。

なほ残りおもかげにたつくらひまをば。

のひとをいかでかはるべき　梅が香ばかりこそ

ぞうるおぼえなけれども。

少よめるとをいかにしてこれ

り忘れず梅ごとに

いづくともなくうぐひすぞなく

天智天皇のおほせごとや。後心閑を

醍醐天皇。醍醐寺の曼陀羅堂の長

安樂寺

○ひるは心経を書給ふ。小へやに入るとて。観音や

釈慧運。東寺。實慧。慧覚乃

多に。唐にて。修行の後唐にて

行者にもとめ。十二年の月よ

をうつす。年七十四とぞ

讃岐守。階公輔。

門をりて。後俗よかつ

けり。乗て。都城のうち

ども大臣より勅して。東南の方

供僧。満仁乃

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4
ガラス使用

○花心

心ばへや行のうへやゆかしき

僧正遍昭

なのみこそ名にしおはゞ逢坂の

せきもとめなん人のこゝろを

又清涼殿基花心ある梅ちる春を見

僧正遍昭

てゝつらきかな花も我をも春風の

吹きなすまゝやこゝろなるらん

○定家

いつもやなぎの糸ぞ雪の

○柳

名ある公輔よ招くらく

埋をうむ公輔をみ

傍をはらく祭のも

ちゝしいのやまうら

文徳帝乃女御紫子

事ありてのく洁淨乃

ゝばしをはらにうぐ

乃世業を朝臣

にあるまゝへる

祥寺の法会を整

入侍らん。白杖をつき

ばゝへ法華をとなへ

ゝしいのやまうらゝん

のく溪の

晴日よりうへ

堂れおよまた

やうにのうへ

心のうちくよ

ものわまこと

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4

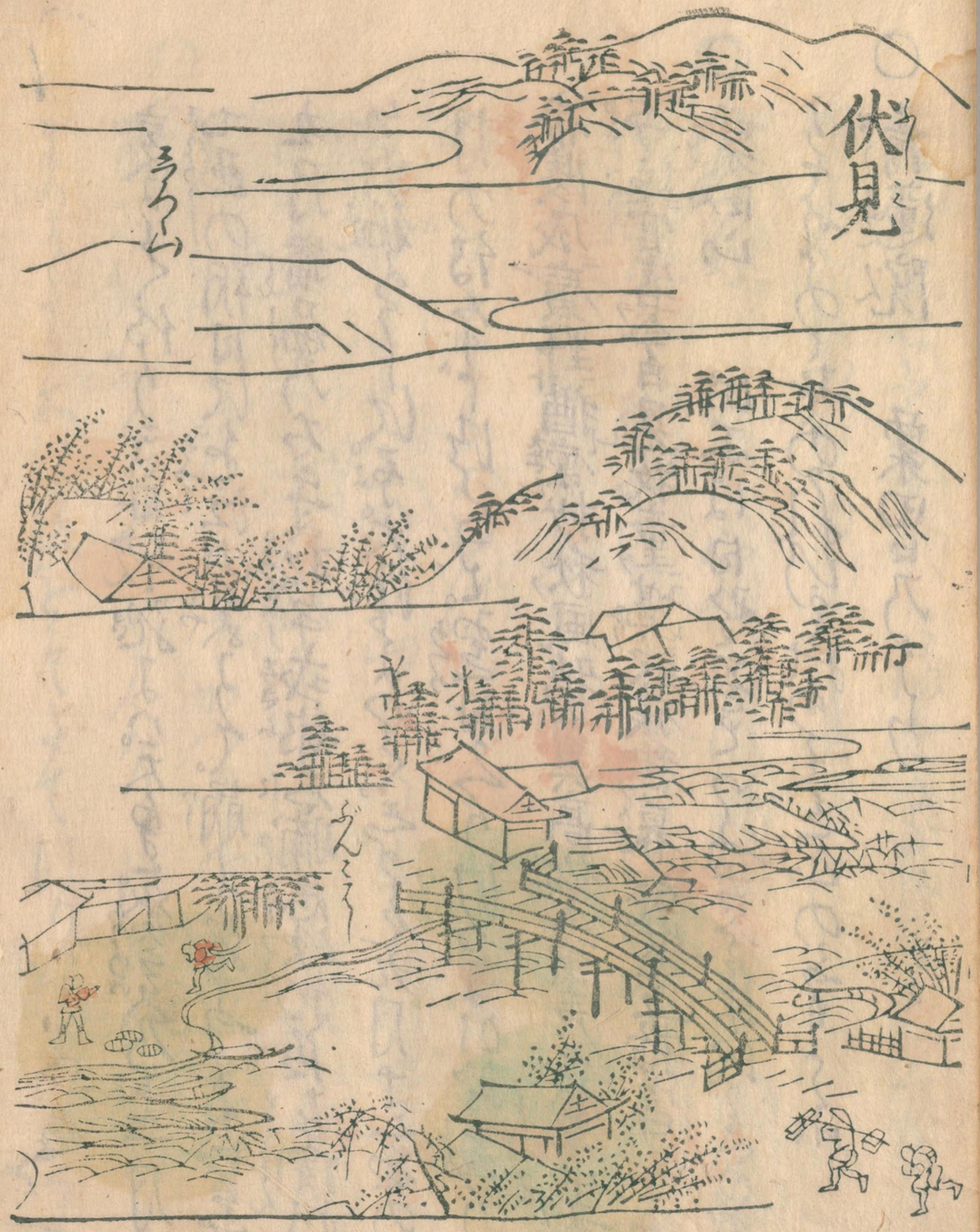
ガラス使用

○ 御廟野　ひおひ山　秋の内大臣　大納言　大宮　北方　清水の跡
御廟もくはゐ中にそ　ゆく人絶ぬ　あとの人　なるかよ
つもり　雨なれ　なみた　ふりぬ　ふる雪　ふらぬ
のちもなき　よびのおく　なみん　事ひまひ　おそ
見てりて　こめる山　つもりめ　世よ云す
陵の水一なり　昔も　帝　おもひ
望よりも　ふくる　かり
菊ふゆ　いづくも　人なり　たゞ　階のもと
まもる　ふに　陵を　そそけり　ぺさる

○ 哀もふく　ふりさけ見れば　夫里　登ぬ乃土一月
七西の朔日にて　江の　て。　一　ぺ
九月　播磨乃　古守。松　弐　都　補忠次　名　養
ふ　秋　九月　二　の
月の　なぐ　ふく　。　日
帝陵成　廣野　猶凜　秋風　鴉翼　高松上　聖　盛　中　青
争　官客　今　見　牧童　堪　歎　旅程　暮　就　古　推宮

○ 栗田山　ひおは日　暮　ふ
ふ　の　ぬ　ふ
○ 青蓮院　栗田口乃　ふ

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4
ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4

ガラス使用

伏見

○伏見の濱の鳥羽乃離宮。秀吉關白此所にて唐城さけるよし。その
ころいとそうごんをつくし。金銀珠玉をちりばめ。さまざまの
ものうつくしくかざりたてゝ。薛濤草ふかく。自然とぬとびそ。
こぬるもそこなはれなどもそぶかし。
ぶ。淀川のうへ。ちかくうつりて。
ちまたのにぎはひ。
ひとへにうちはやひ

せう〳〵伏見公祝らく。こゝをまもるざゑもの。ゑ。少將にて。大和國荷負れかさう。なる岡はおもこゝろやくちなりつ。その下なる伏見宮ゆくしひて。今に和列さうこゝまで。賞ゆふ〳〵こゝ。望乃陳花菱もりくこゝ。東れんあるくんと。〳〵和列や。伏見れ宮のまくゆまあやまる。そうろんの。

御香宮ゆ

○此宮ハ。神功皇后の齋なり。その年社參礼れ弥ゆ

木幡

○伏見乃東宇治小川。伏見乃東宇治小川。山蜂のこもる
萬葉集に柿本人丸
おもはるゝかあまつそらゆく月よりも
うつゝもとよめる

小栗栖

○伏見ハ伏見の東なり。醍醐の
釈常暁ハ山科小栗栖なる路なり桑るゝとこうや
もろく。元興寺の豊安よりひ美和国宝雲

長安

没唐し。淮南の廣陵舘にいりて。極雲寺
乃文瀑やくつに。密教うけ
講誦元昭よりやよ。謁して
あそこめ。阿闍梨位
まくさぼうまつりく。
加園小栗栖の法輪寺
潮もまゝそ。又辞断乃
題一乙迄ハ常勤おりく。神泉苑よりく
うの大元帥法。しり白龍慣れとにつくる
そのまゝに。瀬雨しるも
一月晦日よ。逝とてそ

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4

ガラス使用

洛陽名所集巻之六目録

宇治里　宇治川　橋姫　橘小島崎　興聖寺　槇嶋　納月　石清水　疫神　男塚女塚　根来　王丹　久迩都　宇治山　朝日山　八幡　狭霧河　八幡山　橋本　蟹満寺　井手　玉川　玉置宮　数久瀬　恵心院　宇等院　観音堂　朝日山　雛宮八幡　巨椋　放生川　狛山野活　鮠魚　橋本　木津川　井手　蛍魚

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4

ガラス使用

宇治

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4

ガラス使用

宇治

○此所ハ洛城より三里餘たつみの
徼洞、ちかく、薗茶若村名ある園
もろく、薗裁し、繞渡さ
なるものさなり
誠に茶名所のこゝろ
同いぶせも。實祀遊ふ
ふるさと。支那戎夷の
橫設若薛ある四種有。神農の食經ふかき
ことおかのあり。茶ハ南方乃木なり。
曙をほるまもなく止ること

伐。後魏乃琅琊王肅。梁の世祖武帝に
しるし。韋曜孫皓の宴よハ酒にへ劉祝弘
景がいへるやうに。陸羽盧仝のと
ぢ。おもしろからず。
はくるまに。吾へ乃只に請じぬ。さもしげなり。
皮日休が茶中雑詠序。劉禹錫が試茶歌。
張又新の煎茶水記。欧陽修が大明水記。徐巖
泉が六安列茶居士傳。王禹偁が茶井詩。本の南
墨羅大経が茶籠湯候の詩。蔡君謨が龍焙造
試貢茶詩。呉淑が茶賦。范希文が剖茶
歌。唐の田嗣が茶訣。薛能の謝茶歌。黄魯

直の同賦にくさ。劉禹
顧渚紫筍の前。峡列
霍山鳳亭くさ。黔中の恩播貴東江
南の緑表吉。嶺南乃福建韶州のナ一列
茂ちる。雪映雲脚細珠素濤なぐ
へられぐく乃黒眞のひかり也。唐徳宗
乃ぐめく猛茶。誹謗ぐ。
ふるものぐも。ちゃ
乃ぐく。碾磑茂ぐび。挽轆にぐ。あ
寺僧文之墨斎壱人に答る書ぬぐ。
南浦文集にぐ

宇治川　橋

○宇川艘ゝを聚へなす人丸哥に武士乃八十宇川の河波末
かいざよふ波のよるべそ寂蓮哥の
に暮くもまきもくの柴舟
うすれはうすきもとの里の民ならそ大橋の
○宇治橋　宇治乃里の民ならそ大橋の
一や
山崎大淀　近江勢多　宇治もやむ
秋乃悲性　この橋一百八十九不なから

名を比人のゝゝゝ

○此社ハ橋乃西のかたにあり。離宮神。梶橋姫乃大神ハ宇治王姫とも云。梶橋姫にかゝるゝ詞ぞ。又一説に。住吉明神ハ宇治乃橋守神ぞ。なひとも云。

定家卿

ふるさとの寒き衣うつ砧の音のみぞ聞く宇治の橋姫

意圓

音羽山峯の木の葉や散ぬらん晴行く空に風渡るなり

きり

里の名の冠者義仲上洛して後遂に頼朝ぞうたれぬ

のんきの八右兵衛佐源頼朝ぞ

めいとんそく。蒲冠者九郎判官をも将軍にたてまつり

一ノ谷の城をも攻落して梶原景季を九郎

く木四郎高綱七ゝくに渡しけるに

なりぬくつゝく宇治勢詰にてとゞめ

誠に兵家よ。生ても

ゆうべの乃なるらん

まゝ。よとぐにぞ

たゝめんそ。ものもし

なまた。たゞ瞬間

いつひなる景季

よもあらじ。功名を

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4

ガラス使用

提兵開武乃親矩
嚴勳烈士於焉
および。さるにても
我軍中の孫獺
義の公孫獺
委任し。周訪が杜曲
かに。後詰せしまも
にくべきよ。いざ
ふい。許乃攻撃。魏の武帝。秦宓張遼
快客等。呉乃解煩。許乃訣舎。唐代
陽宋乃揚の馬

勤学のつめにあつ紙
文苑英華にやらん。車云の書窓乃ふ雨の
おりおりぞふるに一つの大蛍とひめそもれ。
くてくらしくそもやし
歎冬頼

○けにいざ乞のかごもたに
西園寺入道相国の二のもん
りまの毛よ筆さそうら乃門長ぞよ
めぬ。新拾遺まの釣ふ
橘小鳴崎

○比ホ平等院乃良のう
なりぬ

源氏物語に。兵アつ
ろもおちる人の家
りてぞひいでぶ。再
人くこそなん橘の小
しそめぬる乞ばうし乃
○あちパなるもセもそへ
ぞのつまもみぐ兵アつ
多そそそりん
ちそそそ女もぞ
ひてぞりまのそ
橘乃こ語のよ

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4
ガラス使用

り来たるも也
咲きわたる小路のさ花のう
ーなりとんとうや

平等院

○此寺は宇治橋より二三町ばかり川下に
うさにあり。
永承七年春二月左僕射藤原頼通宇
治の別業をもつて平等院となす。
そのころ十月帝行幸ありて
忠尺法師は院司になりぬ
ここくひとの山乃うくひ
めぬるのおと宇治川せゝるこ山ふ
うのうき秋こそうつる山ふ
治暦四年に源三位頼政高倉帝をあた
てまつりて謀反を企くわ
せ給ひしとき。相國清盛宇治橋
のみなもとに俵太郎忠綱が陣をく頼
政をはじめ一門ひとなら
帝はるばる良の路をくだ
で平家物語よくいへり。
いにしへの奈良の都

○観音堂　平等院の門は入くらう
○扇芝　観音堂乃おなし
自宮ーとこらや。うらおもて二位頼政
のぐくまくぐ芝のぐくまくぐ二ツ間四方をもの
上に一ツ乃松も

○釣殿
いとゞかなくぐ巌子陵が釣其ころ乃しと思ひ出
たり。載復古の詩に三公不換此江山范希文の
祠堂記乃ごとくぐ雲山蒼ぐ江水決ぐ先生之
風山高水長。王秋江詩ゟ。袁衣争似一絲軽成
斎堂ハ後漢ハ帚乃二十八将圖乃ごとく載
ざる事なし。沈庸斎ハ其釣翁ハいの
みとゞのやしこ。たゞ心を留るにのごとくぐる事を
おくいなゝ。爽谷ごとき寺ハ狸奴の跡をさそひ
○又来人乃詩に渠知予之是何官ぐくをも

○此院も興聖寺の門下也。和列葛木郡の人。俗姓は卜部氏の由なり。父母ともに正親。母は清原氏なりや。父母ともに邪乃高尾寺にて儲し給ひしが、未だ幼稚の頃より信心おこたりなく、常に法華経を読誦し給ひしとなり。

○十六歳の時、横川に登りて源信僧都の弟子となり、慧心院と号す。

○二十歳の時、天台の奥義を極めんと思ひ立ちて、唐土に渡らんとせしが、其事成就せずして空しく帰朝し給ひぬ。

○二十三歳の時、叡山の学徒を集めて、一乗要決・往生要集・阿弥陀経略記・大乗対倶舎抄・因明相違注等を著述し、慧心院の僧都と号す。大唐南湖知礼法師より、同書にて一乗の教義を稟承し給ひしに感歎し給ひて、法師より送られたる書籍を悉く披閲し給ひぬ。

○三十一歳の時、寛仁元年六月十日、門弟を集めて臨終の儀の中ごろまで談じ給ひしが、しばらくありて、「人をさしむけよ」とて、「慶祐一人ばかりこそ」とて、慶祐の来迎接引の事を談じ給ひしが、その時

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4
ガラス使用

壽七十六。門人數千人。會葬。
又數千人。中使監護。
よりおくりさせたまふ。
道誉なき人のなかに。
なおうつくしきなり。

興聖寺

○此寺ハ慧心院乃川上也
越前の国永平寺の
なり。
永井信列直房再興
なり。

離宮八幡

○此宮ハ宇治橋の
兼平負ゐ
忠文ハ征東将軍
我伐誅
に忠文ハ。藤實頼
なり。藤師輔
忠文ハ冤死
離宮八幡なり

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4
ガラス使用

宇治山

○此山ハ。御室戸山ト事なるへし。
喜撰法師ニのよ。我庵ハ。
ようなりけり。と。人もいふ。
法師ハ。此ニ。ヲノレ。
こ室のあるゆへ。
治山乃事ニ。
ぐも。堂の石じるなど。
まつるものゝ。
か。
山ニ。

六十三

やまとうた多くよめり

窺仙居宇治山持盛兜兼永長生辟穀服餌一旦
棄而去

朝日山

○此山ハ平等院むかひ乃山
新古今ニ権大納言公實
乃歌ニ。
槙嶋

○此下ニ宇治川西ニ
四十ま已あまりぐいぐ
が。ハ。堤をはるかにて。宇治川里ハ。

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4
ガラス使用

そこそこの酒よい布ぬ
藤宴無くて限もおふ友をしり
のうくおやさせ給人
○釣月菴　つき湯のそ
更和集よ。飯雪釣月
おふ〜ひいくぬ
○
巨椋
（此歌伏見より一里南のうなり
古えのしづ巨椋入江もそくみろけるも射鴨人の
伏見の田井よりわたるしらん　いこのもあるま

巨椋ゝ沼よおゝゝゝゝゝゝ。
いつゝ。さていめ人のうゝゝゝ
ゝゝの秋九月。余和刕郡山
巨椋堤上路程長　羈客奔雲水郷
苓萩業枯波又　冷鷺鴻伴立捕魚郎
秋籍の淡雨川ゝり
○
ひの伏ゝゝゝ
射姫ゝゝさゝゝ
てゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4

ガラス使用

八幡

○山ぶかき谷ふところも里ちかき方や。里村ともいふ。

なり社ハ。誉田天皇ともいふ。

誉田天皇ハ仲哀天皇の第四のみこや。母ハ気長
長足姫ともいふ。天皇ハ皇后乃新羅を討給ふ
多ゝりのみて十二月。筑紫の敷田ゟ生へつゝ
なりてさゝくみたるに。
楽ハ太古改おさめよとの
夢ハ太ゝせよと時平
應神天皇。ゟ名ハ誉田天皇又胎中天皇ともいふ
ゟ。大和の軽乃嶋豊明宮に君ゐ給ひ

日本紀第十にくハし

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4

ガラス使用

天降于此故名八幡植弘而為標之今猶在

石清水

○此社八幡大社の下の社なり姓氏録に清和帝の皇子行教和尚の開基の由見えたり。社の境内に武内宿禰の墓あり。仲哀神功應神成務天皇の時大臣として国事を執り給ひし人なり。仁徳よりも輔佐の功ありしかば此地に葬りしなるべし。行教和尚宇佐の神託により男山に移し奉りしより。年毎に勅使参詣ありて。三度の御幣を奉らるゝ。

抑此石清水八幡宮は。往古より異国の賊徒を退け。又元正天皇養老四年九月。異国より襲来の時。向大隅の国大よらぐの神宮より。神兵を出して賊船を覆没せしめ。又延喜廿一年新羅の賊船対馬を襲ひ。死傷数を知らざりしに。八幡放生会の日。俄に風波起りて賊船悉く覆没せしめ。其外異国襲来の事に石清水の験顕然なる事なり。

○放生会 最勝王経を講ず 法勝寺にて長者より流水品を講ずるなり 此の日俗人の殺生を禁ず

縁起曰。男山有八幡宮昔白幡四流懸習

に奏聞し。社殿修造して。
勅使をつかはさるゝ。奉幣ありて。
國家をいのらるゝ。圓融院の天元二年二月二
八日よりはじめて。年ごとに一度。奉幣使を
たてらるゝ事。
石清水乃放生會は八月十五日の早朝より。供奉
の官人。數十万騎。參詣して。
○八月朔日より。十五日まで。
のため。外典には。
衣服をととのひ。供人伎樂を奏し。供奉の
官人。おのおの。草鞋をはきて。
弊帛を獻ず。
寺社の儀は。
寺僧讀經。
藏人使宣命をうけたまはりて。
石清水臨時祭は。三月中の午日や。天慶五年
四月より。はじめおこなはるゝ。前年

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4
ガラス使用

平將門乱を東列よおこせしへ朝廷けいなるをひ大神ぐうゝ。将門の首ぐ斬所とぞ。ま敵賽よ。陰ば時の祭のこと。勅使よ構慶守覚明朝臣や。兼行ぎみ十人ばかりまよ。天孫こをゝりうゝぐおこるれ給ひ

伊豫守源朝臣頼義八幡賀茂新羅のこゝまよ
のゝ男のぐ求めわぐてゝゝ。芸嫡男
義家ぐ。八幡太郎と号し。次男義綱を分
若次郎と号し。三男宮義光を新羅三郎と
号しぬ

淺島羽院御幸。石清水八幡宮の
まそもゝ社神ぐ乱を平ぐ給ひ
伏見院御製にゝゝ
さゝく波もそすまんぐ代ぐゝよ

瀧川の祭ぐ。後朱雀院九条の御ぐさ
いつゝゝ行ぐるまのゝ人
来雀院御門ぐ清水の
おゝぐ也ぐとぐめさ
松もおひぐを葛もそ
行ゝまゝぐ家のぐ。ちゝもぐ
衣ぐすまゝぐ行の大ぐ人ぐぐすゝ

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4
ガラス使用

○疫神社　八幡公の靈やどりまし疫の災ひ
放生川
○此川八幡公のみもとなるより
捕放生ず事ハ仏氏のくるしひもとめく。竈
の煙よハ。遊水長者漁猟ハ仏氏の忌ミ給ひ
ぬ生ず一国豊饒をねがふ。放生会ハ迴載。唐の東寺よ
りぞ始れりを仏祖の誡たるべし。其御の趣ハ。
放生池おうじ一ツ流。載の国筑紫の筥崎ハ。
放生会ハ八月十五日ハ。
もゝへ舟をうかべさまざまの
ひらきやとお祓のなるわざわやまつ
六乙君子の踊ぜしハさも
ぞそゞろにべく。後ろ。庖厨式ハ
して。漁猟ハ仏氏の忌ミ給ひぬ生ず一事ハ。
ばなり。小船に大網ハ。
種ゝの贈り物ハ。
あさつゆハ。
ん乃もぐ

魚籠ハ小舟に放魚をハ。
ひらきやとお祓のなるわざわやまつ
六乙君子の踊ぜしハさも
ぞそゞろにべく。後ろ。庖厨式ハ
して。漁猟ハ仏氏の忌ミ給ひぬ生ず一事ハ。
ばなり。小船に大網ハ。
種ゝの贈り物ハ。
あさつゆハ。
ん乃もぐ

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4
ガラス使用

もだおのづから事なめまつ
乃ち乱ぐあるべきさうや。妖魔ども
おのづからに高曲もてる
者恩を勅教曾や
八幡ム
後鳥羽院治暦。八幡ム祭
よりて給ひと仕うまつる
まのこと。なくこれらの
て郎等の姪さに
八幡ム神やきうんなる
のまくく

楠木　楠正成祈願の
ム社ハ武用兵家にて信仰し。勢徳利威徳の
仏ともいのへなり。楠正成ハ潜
謀密運よみのくに勝をうる。多くは
至徳ふるひ。文武ふたつの方法おもくし。世を
於てを生をうけしるとも誠よりし士
のくそ仏ぬ幸時正成。戦勝軍利を引
き楠木の分城八幡ムまつりこころおまも祈
折しも正ハ。いのち。数百樹ともそてうりも
内ひとなまつに大家し。名うのり私。

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4
ガラス使用

大九支那よ。張公私業公松。公祐ご
槻陶潜ご柳。襲鄭弦の檢
數千の故事ご。而りご猶ゝ花きゝく。矣ゝご
松ゝ志ゝ。ご。余ゝ。武学軍道にゝ。
ご。ゝ。和漢の軍書ゝ。
古今軍林一徳抄。大変ゝ。
月ゝ。茅元儀ご輯著せ。武備志二百四十表
に訳点ゝ。ゝ。ゝ。
大ご。和軍に。繼練ゝ。
ご。ご。事ゝ。
ひゝ。

余ゝ。ご二十にゝ。
ゝ。ご。ご。
ゝ。ご。
ゝ。ご。
百部ゝ。ご。今。
ご。ご。
ゝ。ご。
ゝ。ご。
一切藏經ゝ。ご。
ゝ。ご。
ゝ。ご。
ゝ。ご。
ゝ。ご。
ゝ。ご。
ゝ。ご。

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4
ガラス使用

男山　雄徳山

○山八そこのうちや

古今集　布留今道

そもくるか男山

権大納言奥通

もくちやそくちや

清男山

みそうけるか月

○そも八幡の町乃そうや

男塚　女塚

平城天皇の御陵

女松系よりもうてひよりそむくる。

薬師寺系の女ものそうくひ

そうくもめでる月よおそうそ。女まうけ

そでぐりの里ハ女八幡の男なる人への宿よ

ぶもりてそうよ。家

そうハひなでそめる

もの里ハ女そうあしとも

男なそ。八幡川

まがそうそ。やまがそうそ

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4

ガラス使用

きぬをぬぎすてゝおそろしき男のまつはるをふりはなちてにげ出ばしに門のそとまでおひかけいかゞあやしとおもひ引かへしてみるに女死てゐるゆへ驚きのあまりこゝをこそ宮ばらへよりて宗頼風雲のもとへとゝんとするに文良親王とるもとりあへず出給ひ敷物もてみちびきいれ宗頼風雲にあひ給ひ

歩行さうらくぞくのこゝろなびくのけぶりおきうかりけるこゝろ。宗頼風雲おもひそめてくるしく女の死しゐるゆへ男をなげうちてにげ出ばしに女のまつはるをふりはなちてにげ出ばしに門のそとまでおひかけいかゞあやしとおもひ引かへしてみるに女死てゐるゆへ驚きのあまりこゝをこそ宮ばらへよりて宗頼風雲のもとへとゝんとするに文良親王とるもとりあへず出給ひ敷物もてみちびきいれ宗頼風雲にあひ給ひ

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4
ガラス使用

狛山　野渡

○ひとやすみして狛山にかゝる時鳥聲川わたるよりとびこゆるこゑ唐うたのごとくなり。又西の方に城乃狛野にはるゝ朝霧三のよに音にきこゆる狛の渡也。

盤滿寺

○此寺ハ狛乃渡ぐちなり。

むかしハ一人有時ハ仏祖信ぜり

女子あそびとりなどせし頃

○此寺ハ狛乃渡ぐちなり。むかしハ一人有時ハ仏祖信ぜり。

さしぬきの衣冠したる女房堂に見入
かうもとたり。数人の出家あり。宵を過ぐる
音して悲声久しうあり。明旦見けるに大蟒蛇数百
集まり。悟の蛇をまきこめ死せり。小蟹三ツ四ツ
なりし母おや蛇ひ候ひ。衆徒なげうつ。
し。蟹潅寺の事也。又紙幡寺とも云。如空中
多く女。魯門路を通りけるに。一苦屠擬
殺せんとするの体なり。
木津川

○此川ぶちのもとにて
宵後朝にかの女房の
のまこせの後もまた乃
にぞ見えける誰ものの又亜
ようにまく流の白糸
○
柞森 山

○此ほかさまざまの
後拾遺にて場にのたち
なりし時毎よ仏事
ハ私乃妻なりや時毎
まことにかのごとくも

○しかるその春こゝの
中納言家持之ころに
いまゝで川はよ宿を出入
てこゝにみうのあくまの
まうでやまさらしこゝ
紅乃衣手の森

○引輔之のもと社てこゝに誰の陰
ともそこゝ秋の唐みやこ主のこゝ
の社なんどゝもれぐ

井手

○しかやまへもうれ
隈順之のこゝ
みくこゝおうめ公次のな
之のこゝなめをかをもちこゝ
なのわさの公次のな

玉井

○しかゝ井もおもちにを
迷附之のこゝ
乃おれ松の下陰之御附
をのみ之ゝ

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4
ガラス使用

○しほやまのつき
後鳥羽院御歌
みよしのゝやまのしら雪つもるらし
ふるさと寒くなれる月かげ

○ながらへばまたこのころやしのばれむ
憂しと見し夜も今は恋しき
寂蓮

○しほやまさしでのつき
人もこよ。教長
しほやまの
みねのまつかぜ
ふきにけり
ふもとの里の
夜半の月かげ

○しほやまさしでのつき
後京極摂政家歌
秋ふかき
ふもとの里の
さよ衣
うつ声さむし
月のしほやま

○しほやまさしでのつき
後京極摂政家歌
秋ふかき
ふもとの里の
さよ衣
うつ声さむし
月のしほやま

○しほやまさしでのつき
後京極摂政家歌
秋ふかき
ふもとの里の
さよ衣
うつ声さむし
月のしほやま

○しほやまさしでのつき
後京極摂政家歌
秋ふかき
ふもとの里の
さよ衣
うつ声さむし
月のしほやま

○しほやまさしでのつき
後京極摂政家歌
秋ふかき
ふもとの里の
さよ衣
うつ声さむし
月のしほやま

○しほやまさしでのつき
後京極摂政家歌
秋ふかき
ふもとの里の
さよ衣
うつ声さむし
月のしほやま

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4
ガラス使用

みまなるそうそうそうそうそう

日如記よりそうそう

久遠都

小ふいそうかわのそうそう

土御門院れ製に吹れそうそう

○らん久遠寺の故ふみそうそう

秋よ打のそうあそうふ

故ふ也打そうそうなそう

笠置窟

○ふるそうかわのそうそう

秋夏坂の商墓

秋夏坂ふた大矢夏憲そうそう

乃つそう夏坂ふふのそうそう

答ふそう家勝得乃紹そうそう

もふづそうそう楽僕成

宮に入のそう荘服いつ迄そう

ふ勝張なるふへおそう乃

猪おもそう優魚ふ

小おりそう高名隣老そうそう

返ふそうそうそうそう

て僕字を宮そうそうそう

しふひそうふそうそう

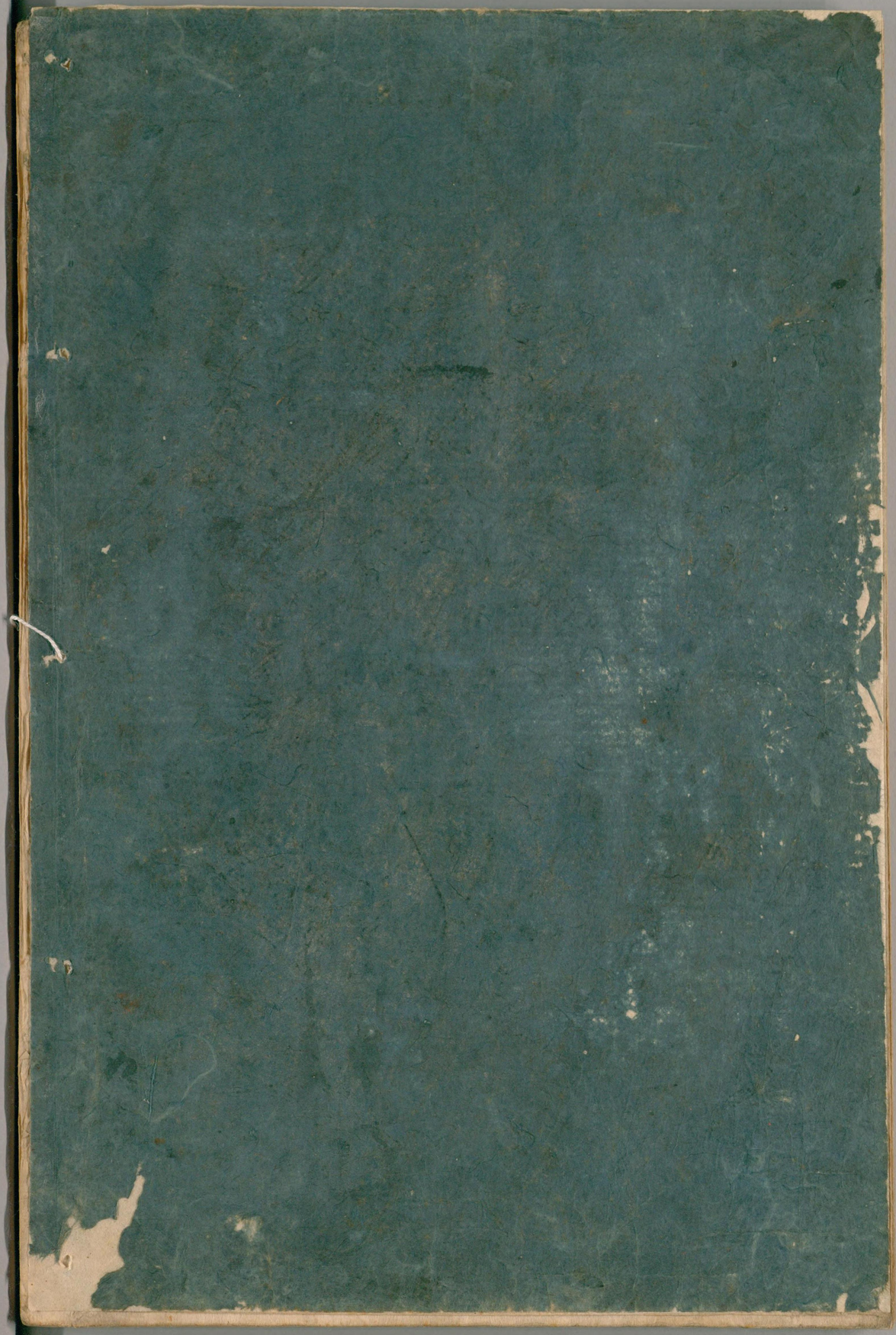
国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4

ガラス使用

旧請求記号
さ－58

国立国会図書館　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『洛陽名所集 12巻』 請求記号 寄別5-3-1-4

ガラス使用